



現代文芸論研究室へようこそ

現代文芸論って、なんなの？

この研究室に入ってから、度々こんな質問をもらいます。彼/彼女は、恐らく「現代文芸論」という言葉の意味を知りたい訳ではなく、要するに「現代文芸論研究室って、何を研究しているところなの？」と問うているのでしょう。確かに、「フランス語フランス文学」「インド哲学仏教学」「心理学」と並び立つ中で、「現代文芸論」という言葉はいかにも要領を得ませんよね。

そこであえて遠回りをして、この「現代文芸論」という言葉について考えることにします。誤解されがちですが、この「現代」は、決して「文芸」にかかっているわけではありません。そうではなく「論」の方に、ひいては「文芸論」にかかっているのです。だから、扱う領域は現代の文学には全く限られません。文学を、現代の視点で読み解いていく、その視点こそが現代文芸論の唯一の条件と言えるでしょう。

さて、そうして我が研究室の扱う領域は、一気に無限へと発散します。研究のモード次第で、どんな文学も（建前上は）研究対象とすることができます。ここで冒頭の間に立ち戻ってみると、こうした状況を踏まえた答え方が少しずつ見えてくるのでしょうか。僕はこの手の質問に、「文学部の、補集合って感じ」と答えてきました。ややつっけんどんで、意悪な物言いにも聞こえるかもしれませんが、僕にはこれがなかなか的を射た解答であるように思えるのです。「文学」という総体があって、そこから「フランス文学」、「インド哲学」、「心理学」……と拾い上げていって、残されたその下地。従来の縦割り型の区分ではまだまだ拾いきれない、面白いものたち。虫食いのようでありながら、その実文学部の各野を力強く裏付けている、形も名も持たないその領域へと、我々は足を踏み入れていくのです。

研究室をもらえないマイナーな文学も、なぜか研究室のないラテンアメリカ文学も、国と言語をまたぐ比較文学・翻訳論も、文学の概念自体をメタな次元から扱う批評理論も、ここでは研究できます。その研究に哲学、心理学、歴史学の視点が前提となっていたって構いません。現代文芸論の大きな魅力の一つは、間違いなくその研究領域の多次元方向への豊かな広がりです。友達、先輩、先生方と話していても、その興味・見識の広さに驚かされます。それまで予想だにできなかった世界が、目の前にたやすく開かれていくのです。

そうしてこの研究室は、いつも開かれています。分野、研究室の枠を超えて、興味・関心を共有している、いや時には全く共有していない人々でも、面白い文学とその読み方を引っ提げて、積極的に出入りしています。境界線の滲んだ、いかにも掴みどころのないその人脈の広がりが、まさしく我々の研究している領域＝現代文芸論を体現しているように、僕には思えるのです。

INDEX

現代文芸論のスタッフ紹介 2~4

現代文芸論とは！？ 5~6

コラム——駒場のみなさんへ 7~10

過去の卒業論文 10~15

研究室開催イベント 16~19

☆ 本冊子の内容に質問があったり、さらにこんなことが知りたいといった興味が湧いたりすれば、現

代文芸論研究室アドレス（genbun@l.u-tokyo.ac.jp）までお気軽にご連絡を——

研究室のスタッフ紹介

柳原 孝敦 教授

ラテンアメリカ文学、広域スペイン語圏文学。ヨーロッパから南北アメリカを含む移動をした人たちに興味
の中心がある。著書『ラテンアメリカ主義のレトリック』（エディマン/新宿書房）、『テキストとしての都市 メ
キシコ DF』（東京外国語大学出版会）、共編著書『劇場を世界に』（エディマン/新宿書房）、翻訳
にはボラーニョ『野生の探偵たち』、『第三帝国』、アイラ『わたしの物語』、『文学会議』、バスケス『物が落
ちる音』、カルペンティエール『春の祭典』など。

授業ではオーソドックスなラテンアメリカ文学の入門だけでなく、毎年、あるテーマに沿って文学作品を読
み直す試みなどもしている。文学作品をどれだけ面白く読めるか、それが重要。



阿部 賢一 准教授

中東欧文学、比較文学。とりわけ、プラハの文学、「文学史」、シュルレアリスム、幻想文学を専門とす
る。担当授業は、「中欧文学論」、「現代文学論」、
「文化批評」、「チェコ文学を読む」など。単著に
『100 分 de 名著 ヴァーツラフ・ハヴェル「力なき者
たちの力」』（NHK 出版）、『イジー・コラーシュの詩
学』（成文社）、『複数形のプラハ』（人文書
院）、『カレル・タイゲ』（水声社）、編著に
*Perspectives on Contemporary East
European Literature: Beyond National and
Regional Frames* (Sapporo: Slavic-
Eurasian Research Center)、『バックナリア 酒



と文学』（共編著、成文社）、訳書にペロヴァー『湖』、クラトフヴィル『約束』、アイヴアス『黄金時代』、『もうひとつの街』、フラバル『剃髪式』、オウジェドニーク『エウロペアナ 20 世紀史概説』（共訳）など。

藤井 光 准教授

現代アメリカ文学、英語圏文学。アメリカだけでなく東南アジア出身の作家など、英語を使用している「グローバル文学」の諸相に興味があって勉強している。著書 *Outside, America: The Temporal Turn in Contemporary American Fiction* (Bloomsbury)、『ターミナルから荒地地へ「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』（中央公論新社）など。訳書にジョンソン『海の乙女の惜しみなさ』、ブラセンシア『紙の民』、ドーア『すべての見えない光』、バトラー『血を分けた子ども』、ジャン『その丘が黄金ならば』など。授業



では文芸翻訳の実践のほか、現代英語圏の小説や文学批評の講読を担当している。

阿部 公彦 教授

協力教員。もともとの専門は英米の詩。ただし、近年は小説や、日本文学も含めた文学一般も研究の対象とする。詩、即興、スローモーション、丁寧語といったテーマも扱う。著書は『英詩のわかり方』（研究社）、『小説的思考のススメ』（東京大学出版会）、『文学を〈凝視する〉』（岩波書店）、『詩的思考のめざめ』（東京大学出版会）、『英語的思考を読む』（研究社）など。

五月女 颯 助教

ジョージア 19 世紀文学と、エコクリティシズムなどを中心とした批評理論。批評理論を手がかりにして、ジョージア文学を（日本の大学で）どう論じるか、といったことを考えている。またひろくジョージアの地域研究にも関心がある。著書『ジョージア近代文学のポストコロニアル・環境批評』（成文社、2023 年）、訳書『アニマル・スタディーズ：29 の基本概念』（共訳、平凡社、2023 年）。



島袋 里美 事務補佐

グラフィックデザイナー。研究室 HP やポスター作成を担当。

下島 彬 事務補佐

図書担当。研究室所蔵の本や DVD の管理、登録をしています。蔵書は貸出可。

現代文芸論研究室とは！？

現代文芸論とは、従来の一国一言語別の「縦割り」にこだわらず、世界の文学を——日本文学も世界文学の一部として視野に入れながら——現代的な観点から研究する研究室である。この専修課程名はもっぱら「現代文学」を扱うという意味ではなく、研究対象とするのは近代以降の文学全般である。伝統的な研究方法にとらわれず、20～21世紀の越境的な文学・文化研究の成果を踏まえ、現代の観点から文学に新たな光を当てたいというところが「現代」的なのだ。したがって、この専修課程で扱い得る具体的な研究対象（作家、言語、地域、時代など）は、従来にもまして多様となり、自由な選択の幅はいっそう広がることになる。

授業カリキュラムと研究分野

以下のような分野を積極的に扱うのが、現代文芸論専修課程の特色である。

翻訳論——その理論と実践

批評理論

世界文学へのアプローチ越境文学論——亡命文学、クレオール文学、多言語と文学

既存の専修課程（英文、独文、仏文など）の枠に当てはまらない言語文化（ヨーロッパ周辺地域、特にラテンアメリカ文学の文学）

欧米の言語文化をバックグラウンドとした近現代日本文学研究（主として留学生を対象とする）

授業を担当する教員をごく簡単に紹介すれば、専任教員のうち、柳原孝敦教授はラテンアメリカ文学・広域スペイン語圏を扱い、阿部賢一准教授はチェコを中心とした中欧文学・芸術の専門家として、ボヘミア文学概説や文化批評などの授業を担当する。その他、文学部内からの恒常的な協力教員として、英文の阿部公彦教授が「文学と批評」などの授業を担当している。

現代文芸論では、専任教員による演習がカリキュラムのコアになることは当然だが、その一方で「認定科目」という制度もあり、学生は各自の興味と専門に応じて欧米文学および日本文学に関する様々な授業を履修し、一定程度まで卒業に必要な必修科目として認定を受けることができる。現代文芸論の学生は、3言語以上の分野にわたって学習することが奨励される。

勉強のしかたと卒論

現代文芸論の授業は、言語文化系の専修課程間の枠を取り払い、異なった分野どうしの

相互乗り入れを意識しながら行なわれる。現代文芸論に進学した学生諸君は、語学文学に関わる専修課程のすべてを自分の庭として自由に出入りするくらいの意欲を持ってほしい。

授業履修に関するもう一つの大きな特色は、前述したように、英・独・仏・スラヴ・南欧、国文等の他専修課程の講義・演習の多くを必修科目に代わる「認定科目」として履修できるということである。選択の幅は広いので、勉学の方向づけに関する自由度はきわめて高い。

授業履修の際には、3言語以上の分野にまたがって学ぶことを原則としているが、誤解のないよう一言付け加えておくと、3つの外国語を同様にマスターすることが要求されているわけでは決してないし、そんなことは決して現実的ではない。ここで求められているのは、一つの言語（例えばスペイン語）を中心に研究し、もう一つの言語（例えば英・仏・独・伊・露など）を補助的に学び、さらに古典語（ギリシャ語かラテン語）の初歩を西欧文化研究の基礎教養として身につける、といったプログラムを各自が自分の興味と研究主題に応じて考え、実践するということである（また専門的関心に応じて、日本文学を研究対象に含めてもよい）。それなら誰にでも十分実行可能だし、そうすることによって、世界の文学の豊かな広がりにつながるができるだろう。

現代文芸論への進学を考えているみなさんへ

現代文芸論での勉強は授業選択の幅が広いので大変自由だとも言えるが、その反面、広い選択の幅の中で自分なりの研究の筋道を作っていかなければならないだけに、他の専修課程よりもしっかりと自律性を求められることも覚悟してほしい。私たちの専修課程は、既存の枠にはまらない研究領域に挑戦しようという意気込みのある学生を歓迎する。また、文学を研究したいのだけれども、まだどれか一か国に専門を絞りきれない、といった学生に対しても、我々は門戸を開いている。

最後に、研究室の雰囲気について。発足が2007年というまだ歴史の浅い場に特有の自由さ、助教や補佐員の人柄、適当な人数規模など様々な要素が相まって、研究室の雰囲気はいつも明るい。テーブルに置かれたお菓子の消費量が相当多いのも、みんながリラックスできることの証しだろう。もちろん単にリラックスするにとどまらず、読書会、語学の勉強会、映画鑑賞会等を学生たちが自主的に組織するなど、たがいが知的に刺激しあう空気も出来上がっている。留学生が多いことに加えて、ふだんの授業以外に、世界の作家や研究者を招いての講演会やシンポジウムなどを積極的に行なっていて、国際的な雰囲気にも満ちている。文学が好きな人、好きになりたい人なら、きっと楽しく勉強できると思う。

駒場生のみなさんへ

世界文学へのおさそい

学部4年 杉本はるか

家の本棚には小さい頃に読んだ本がまだ数多く残っています。その中に講談社の『世界のメルヘン』という、全24巻からなる童話全集のようなシリーズがあります。先日久しぶりに眺めてみたのですが、その構成は中々興味深いものでした。

最初にイソップ・グリム・アンデルセンが1人1巻ずつ割り当てられており、そこに「イギリス」編が3巻に亘って続きます。次いで「アメリカ」「フランス」「ドイツ」「ソビエト」「東欧」が各2巻、「北欧」「南欧」「アジア・アフリカ」「中国・東南アジア」「ギリシア神話」が1巻ずつ、そして最後に「日本」が3巻。少し考えると単純な疑問が幾つか浮かんでくる内訳です。イギリスに3巻も割く必要はあるの？ 中国や日本が別にあるのに「アジア・アフリカ」という括りがあるのはなぜ？ オセアニアの物語はどこ？ しかしながら幼少期の私は何一つ気に留めてはいませんでした。その物語がどの地域に属するのか、誰が書いたものなのか、「東欧」がどこを指しているのか、アンデルセンがどんな人なのか、読みながら意識することは殆どなかったのです。

改めて思えばこれは示唆的な現象です。区分のされ方や収録話数を客観的に比べてみると、それまで自分のイメージしていた「外国文学」の向こうに、想像以上に豊かな世界が広がっていることに気づきます。1つの国、1人の作家、1つの作品だけを見ていては辿り着けない世界です。たとえ様々な作品を読んでいたとしても、それらを適切に比較し関連づける視点がなければ意識できない世界です。無論幼少期の私はそんなこと一切考えていなかったわけですが、ひょっとすると大学生になってもなお、そうした世界を覗くことの面白さを知らない人間になっていたかもしれません。もしもここ、現代文芸論研究室の一員になることを選んでいなかったら。

この研究室での毎日は作品を読む中で見出された疑問をきっかけに進んでいきます。疑問を解決すべく勉強し、それによって得た視点をもとにテキストに向かい、また新たな疑問を発見する。その繰り返しによりもたらされるこの上ない楽しさと、新たな世界が見えてくる充実感、それを一人でも多くの人と分かち合いたいと思っています。

迷いの森から

学部4年 井口凜人

本にはさむ「しおり」は、山道に行くのに枝を手折って目印としたことにその名を由来するといいます。本が言葉の森だとすれば、それを巡るための目印だというわけです。しかし、森をなすのは言葉だけではなく、本それ自体もそうです。本が森をなして文学だというわけです（もちろん、本ではない媒体によって伝えられる文学もあるものですが）。

困ったことです。一冊の本でも森をなすというのに、森が森をなしてはあまりに捉えがたい。実際のところ、短い人生の中では、ましてこの短い大学生活の中では、目を向けることのできる文学はおのずから限られています。かなうのは結局、ひとつの興味をもち、ひとつのことに注力することだけです。

わたしは確とした興味の対象が定まらないまま現代文芸論に進学しました。文学を食い荒らしてはきたものの、何を美味しいと思っているのかはよくわからない。クラッカー、ボルヘス、オールドファッション、ブラッドベリ、円城塔、ポテトチップチョコレート、スタニスワフ・レム。そんな状態です。いまは文学理論を梃子にして横軸を作っていくことを考えていますが、ここに来るまではそもそも、そんなことが可能であるということにも気づかずにさまよっていたのでした。

現代文芸論に所属していれば幾度となく耳にすることになる「世界文学」という言葉の捉えがたさは、そのまま豊かさにつながるように思います。現代文芸論の体験は、一見すると断片的なテーマを通じて、その豊かさの片鱗に触れるものとなるはずです（わたしもそのツアーの途上にあります）。

文学の万華鏡

修士課程 コロナ・エルジビエタ・ベアタ（ポーランド）

現代文芸論研究室は文学の万華鏡だと思う。角度を変えて、世界文学の様々な表情を見ることができる場所だ。

私の研究テーマは俳句の翻訳と国際俳句の比較研究だ。現在、俳句は言語と文化の境界線を越えて、世界的に人気になった。芭蕉、蕪村、一茶や子規の名句は多様な方法で様々な言語に翻訳され、鑑賞されている。その翻訳の種から外国語で詠まれている国際ハイク文学が芽生えてきた。インターネットとSNSの時代、国際の俳句コンテストは数々の投句を集める。無論、音調、形と文学表現は異なっている。

ポーランド出身である私の出発点は、当然、ポーランド語に翻訳された日本語の名句の原文と翻訳の比較、そしてポーランドの俳人の活動の研究だったが、現代文芸論に入ってから視野は広がった。ブラジルの歳時記やボルヘスの創作まで、俳句が地域や言語を問わずいかに世界中で関心を集めているのかが見えるようになった。

そして、研究室の授業とイベントはかけがえのない議論の場になった。日本の俳句と外国語のハイクの違いは何だろう。同じジャンルだとは言えるのか。俳句の翻訳はなぜ国際的にこのような反響を巻き起こしたか。俳句の翻訳において何が失われているのか。もしくは、新鮮な解釈が生まれるのか。意見の交換を重ねて自分の研究を進めることができた。

現代文芸論の視点は万華鏡のように、文化と言語をまたぐ、世界文学としての俳句の新しい表情を見せてくれる。これからは修士論文の執筆にその視点を利用したいと思う。



グルジア文学はどこで勉強できるの？

博士課程 五月女颯

「若者たちがこの研究室、そこに所属する我々に興味を抱いてくれるような内容の文章」を書いてくれ、と言われ、正直なところ当惑しています。なぜなら私は東大内部の進学事情が分からない。学部は外語大のロシア語で、しかしロシアはあんまり心に響かず（だって寒いし……）、ひょんなことからグルジアに興味を抱きました。そしてグルジア文学を研究しようとして院に進学するときに、はて困ったな、グルジア文学はどこで勉強できるんだ？ロシア文学とは一味違う、ということで研究したいのに、ましてグルジア語はスラヴ語でもないし…… と思っていたと、なんとそこに「現代文芸論」の輝かしい文字が！

このように現代文芸論は、既存の概念に捉われないことを目標とする、やさしい研究室です。

ところで、グルジア／ジョージアをどれくらいご存知でしょうか？ 最近、国名が変わったけどどうなの？ というような質問をされます（次いでスターリンってグルジア人なんだよね？）が、実はグルジアは文学的にも歴史あるところなのです。今なお、ルスタヴェリという 13 世紀の詩人の詩「虎皮の騎士」が一番の作品として愛され、グルジア人皆が暗誦できるほどです。文字も独特！ こうした、埋もれがちだけど実は面白く、そして実はメジャーな地域にも影響を与えているマイナーな文化や文学をも自由に研究できるのが、ここ現代文芸論の特徴なのではないでしょうか。

ニューヨークのこと・研究のこと・現代文芸論のこと

博士課程 坪野圭介

ニューヨークという街は実にさまざまなイメージで溢れ返っています。自由の女神、建ち並ぶ摩天楼、忙しい^{ウォールストリート}金融街^{ペンダー}、屋台のベーグル、ブルックリン出身のインディーズバンド、サードウェイブのカフェ……。これらはみな、現実存在しているものです。でも、その街のことを頭に描いてみると、いつでも『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のホールデン少年がマンハッタンをあてもなく彷徨っていたり、『グレート・ギャツビー』のギャツビーが夜な夜な盛大なパーティーを開催していたり、スーパーマンやらバットマンやらアベンジャーズやらが空中をびゅんびゅん飛び交っていたりもします。これらはみな、想像のなかに存在しているものです。そして、ニューヨークの（僕にとっての）最大の魅力は、現実存在するものと想像のなかに存在するものとが完璧に一緒になってひとつの街のイメージをかたちづくっているところにあります。もちろん、あらゆる世界のあらゆる街が、現実／想像を混ぜ合わせながら「その街」になっているわけですが、ニューヨークのことを考えるたびに（そして実際にニューヨークの街を歩き回ってみるたびに）僕は、すべての現実空想からつくりだされ、すべての空想は現実からつくりだされているのだ、という気持ちを強くするので——ギャツビーの哀しくも豪華なパーティーを目にして、語り手ニックが「まるで遊園地みたいだ」と思うように。

突然ニューヨークの話始めてしまいました。僕は現代文芸論研究室の博士課程で、主にニューヨークの文化と文学を研究しています。文学・文化研究を行うことの（僕にとっての）最大の魅力は、現実存在していることと想像のなかに存在していることのあいだを、あらゆる手を尽くして最大限自由に行き来しながら、それらをつなぎ合わせて思考できることにあります。そして、現代文芸論研究室という場所の最大の魅力は、現実と想像の両方を気ままに、真剣に、行ったり来たりしている人たちがたくさん集まっていることです。研究室で顔を合わせる人たちはたいてい、ちょうどどこかの国か、どこかの街から帰ってきたところだったり、ちょうどどこか現実の空間へ、どこか想像の土地へと向かう途中だったりします。お互いの中継地点でちらりと顔を合わせる、という感じが、（なんだかニューヨークみたいだし）けっこう好きです。

過去の卒業論文

現代文芸論で学生は具体的にどんな研究をしているのか？ そのイメージを大まかにつかんでもらうため、卒業論文のタイトルを紹介してみよう。多彩な研究が進められていることが分かると思う。

さらに専門的な研究内容に興味があれば、現代文芸論の論集『れにくさ』を東京大学学術機関リポジトリ (<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>) の「紀要・学内刊行物」から探してみしてほしい。主に博士課程以上の研究者が寄稿している文学・文化研究総合誌だが、学術論文のほかエッセイなども掲載される自由な編集方針が採られ、現代文芸論の研究・教育の幅の広さを感じられると思う。ちなみに東京大学学術機関リポジトリには、もちろん他の研究室の紀要も公開されているので、進路選びの参考になるだろう。

令和3年度

三島由紀夫『金閣寺』における「火」と「水」の精神分析
ロベルト・ボラーニョ『チリ夜想曲』の語りの設定
Breakfast at Tiffany'sにおけるヒロインHolly Golightlyの姿
句作の瞬間と身体性——波多野爽波と飯島晴子の制作学
児童文学の発展と翻訳 ——『クマのプーさん』を中心に——
演劇的観点から分析する『若草物語』 ——小説および映画を比較して——

令和2年度

村上春樹『ノルウェイの森』の英訳と映画翻訳における葛藤と喪失、あるいは創造
ピランデッロ『作者を探す六人の登場人物』の翻訳論
テクストの存在論的、読者論的考察——円城塔『Self-Reference ENGINE』を題材に
アダプテーションから論考するストルガツキー兄弟『ストーカー』
テロという「悲劇」を描く——ジョナサン・サフラン・フォア『ものすごくうるさくてありえないほど近い』
娘たちの群像——イサク・ディーンセン『冬物語』をめぐって
「死に至る病」を癒やす近代小説
Tim O'Brien "Going After Cacciato" ——想像力のゆくえ

平成31年度

『バートルビーとジーモン 拒否の戦略』"Bartolby and Simon The Strategy of Refusal"
『ペンギンの憂鬱』における動物・病・犯罪への表象

カズオ・イシグロ『日の名残り』論—ジョークに見る物語の二重性
ジャン＝ジャック・ルソーの『ピグマリオン』とジョージ・バーナード・ショーの『ピグマリオン』におけるピグマリオン表象
リチャード・ブローティガン『西瓜糖の日々』における死とアレゴリー
安部公房『砂の女』における性的問題について
詩人と探偵 "Death of a Red Heroine"における Chen Cao の人物像について
水村美苗『私小説 from left to right』における「私小説」の意義
世界文学としてのカート・ヴォネガット『猫のゆりかご』
川端康成とヘミングウェイ—老いと性の問題
忘れられた子ども時代—『小公女』における翻訳の変容と受容—

平成30年度

目取真俊「群蝶の木」論—語り得ぬ者の記憶と向き合う—
『幸福な王子』と『星の王子様』の王子についての考察
土地と文学—中上健次の諸作品とエドゥアール・グリッサン『レザルド川』の比較研究
ブロッポ『夢遊の人々』における象徴
水村美苗『私小説 from left to right』における翻訳不可能性のレンジ
文学における白痴—『響きと怒り』『高野聖』を中心に
ミヒヤエル・ハネケ「71フラグメンツ」に関する考察
カレル・チャペックの思想と“R. U. R.”論
ヴォルテールにおける「金儲け礼賛」と「ユダヤ批判」の併存について—なぜカンディードはユダヤ人を殺したのか—
マリオ・バルガス＝リョサ『マイタの物語』における語りの技法分析と＜語り手＞
村上春樹から見たフィッツジェラルド—なぜ村上が愛したのはヘミングウェイでなかったのか
江戸川乱歩論—「探偵」と「空想家」の狭間で—

平成29年度

T. H. White “The Once and Future King” における二項対立との対峙
Richard Brautigan『アメリカの鱒釣り』、『西瓜糖の日々』の翻訳分析：名訳と呼ばれる理由とは
『十日間の不思議』における＜意外な推理＞のあり方
片山広子のアイルランド文学翻訳について—ウィリアム・シャープの作品を中心に—
読むことから書くことへ—水村美苗の私小説的語りについて—
Allegory and Ghosts: The Historiography in Steve Erickson's Arc d'X
ディック作品におけるアンドロイド

ブルーノ・シュルツの創作原理―書評・評論・書簡を中心に―

平成28年度

崎山多美作品における舞踊

メキシコ都市の表象 カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』（1958）を題材に

「『異邦人』論争」を再考する

『結晶世界』と『クラッシュ』における死のモチーフ

『マシアス・ギリの失脚』における孤独

日本文学とオノマトペ―幸田文「黒い裾」におけるオノマトペ

二十世紀初頭のペテルブルグ文学―ベールイ『ペテルブルグ』を読む―

など

平成27年度

ドラマ『カラマーゾフの兄弟』のキャラクター像に見る「カラマーゾフ」

『ワーニャ伯父さん』における環境破壊

吉本ばななとアン・タイラーの家族観

平成26年度

『汚辱の世界史』から見るボルヘス作品の礎

『フェルディドゥルケ』における青二才の二面性

印象批評―文学研究における批評と実証性について―

The World in the Eyes: A Study on Marvyn Peake's Titus Books

『悪童日記』における「ぼくら」の語りと嘘

末子成功譚の比較と現在

映画の音を読む―マヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』の音響効果―

「3・11」以降のフィクション

ナルシシズム、死、幸福 ―クンデラ『存在の耐えられない軽さ』におけるキッチュの考察―

石井桃子の翻訳―『クマのプーさん』を中心に―

Barry Yourgau と Kelly Link―従来の児童文学との比較から

On Moby-Dick: Race, Politics and Eroticism

など

平成25年度

ニコライ・ゴーゴリ『肖像画』における幻想

イタロ・カルヴィーノの见えない世界

ドナルド・バーセルミの短編におけるアメリカの諸形象

Alternate Reality: A Study of Philip K. Dick's The Man in the High Castle

The Monster in Frankenstein

孤独なパービテル—ボフミル・フラバル『あまりにも騒がしい孤独』

小説家にして幻視者、アントニオ・タブッキの夢—『トリスターノは死ぬ』におけるゴヤの《犬》の変奏—

ロベルト・ボラーニョを追って

など

平成24年度

初期の北園克衛とフランス文学

別役実とベケット——ゴドーがやって来るまで

Tess of the D'Urbervilles と Effi Briest の比較分析——テスの主体性を中心として

遊戯としての小説——ジュール・ヴェルヌ『カルパチアの城』におけるゴシック性

夢見る街のコルタサル——「街」「高速道路」「地下鉄」「革命」をめぐって

など

平成23年度

文学に見る「名づけ」～スターン、ゴーゴリ、ラヒリ、井上～

Ambiguous Boundaries: Dualism in Thomas Pynchon's V

ゼーガース『ハイチの婚礼』をめぐって —人種を軸とした他者表象—

倫理の崩壊 —『ブラッド・メリディアン』と『枯木灘』における暴力の背景—

ピンターとムロジェックにおけるAbsurd の演劇

明治期の翻案歌舞伎～『人間万事金世中』をめぐって～

アルゲダスの小説作品における二つの世界の葛藤<初期短編から『深い川』に至るまで>

など

平成22年度以前

Between Now-here and Nowhere: The Destruction of Dichotomy and Its Reconstruction
in Fire and Hemlock

Eternal Verities: On James Tiptree, Jr.'s Utopia

On Kazuo Ishiguro's The Remains of the Day and Never Let Me Go: What Has Changed
and What Has Not

「事実」を装う序文—デフォー、ホーソーンを中心に—

ル・クレジオにおける物語への回帰—『アンゴリ・マーラ』をめぐって

自分ということ—ジョン・アーヴィング『熊を放つ』論—

夏目漱石『行人』研究—英訳“The Wayfarer”をめぐって—

北島の詩作に見るガルシア＝ロルカの影響
フランコ・モレッティの文学史概念とレトリックについて
モダンと希望—プルーストとフォークナーの希望学—
American Immobilization: From Theodore Dreiser to Bret Easton Ellis
誰と話をしているの？～『ピーナッツ』における、見えるコミュニケーションと見えない
コミュニケーション～
石榴のシンボリズム
母語教育から『ことば』の教育を考察する
ミルチャ・エリアーデとその探求
『とりかえばや物語』の女君とジェンダー
損なわれた無垢—ドストエフスキー『虐げられた人びと』論
W. B. イェイツと能 — クーリング劇をめぐって —
『ゲーテとトルストイ』と『トルストイとドストエフスキー』 — トーマス・マンの講演
にメレシコフスキーが与えた影響 —
戦争文学における機械の描写

など

ちなみに

先に紹介した研究室の論集『れにくさ』は、2021年度までに全12号が出ている。その中には特集が銘打たれたものもある……

- 3号（2012年刊）：特集＝世界文学へ／世界文学から
- 4号（2013年刊）：特集＝ラテンアメリカ文学、野谷文昭教授記念号
- 5号（2014年刊）：特集＝北米の文学、柴田元幸教授退官記念号
- 6号（2016年刊）：特集＝ロシア中東欧研究、
- 7号（2017年刊）：小特集：ルベン・ダリーオ没後100年
- 9号（2019年刊）：大橋洋一教授退職記念号
- 10号（2020年刊）：特集：日本・ヨーロッパ・世界、沼野充義教授退職記念号

現代文芸論研究室開催イベント

(2014年度～2021年度)

現代文芸論ではふだんの授業以外に、国内外の作家・研究者などを招いたシンポジウムや講演を積極的に行なっている。ここでは昨年度のイベントの詳細な一覧と、それ以前に行なわれた主なイベントを紹介しよう（もし2018年度以前の詳細情報に興味があれば、現文研究室アドレスgenbun@l.u-tokyo.ac.jpまでご連絡を）。

この他に、ハーヴァード大学のデイヴィッド・ダムロッシュ教授が主宰し、世界各地で行なわれるInstitute for World Literatureというサマースクールに現代文芸論は提携校として参加、2018年7月には東京大学で開催された。また文化庁の日本文学翻訳プロジェクトや、東京国際文芸フェスティバル、ヨーロッパ文芸フェスティバルなどにも、現代文芸論の教員が協力している。

2021年度

・川添愛氏特別講義「今のAI、未来のAI —言葉と心の問題を中心に」

日時：2021年5月26日（水）午後1時～2時45分

形式：オンライン（ZOOM）。

講師：川添愛

司会：阿部賢一（現代文芸論）

主催：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 現代文芸論研究室

・第6回 現代文芸論研究発表会

日時：2021年10月23日（土）14時～18時

形式：オンライン（ZOOM）

第1部 研究報告

報告1 安原瑛治（東京大学大学院博士後期課程）「ボルヘス初期詩作品における「不死性」と「強度」」

コメンテーター：野谷文昭（東京大学名誉教授）

報告2 ハビャン・ニーナ（東京大学大学院博士後期課程）「安部公房の「東欧」の

体験」

コメンテーター：西成彦（立命館大学名誉教授）

報告3 オウケンハウ・ジェームス（東京大学大学院博士後期課程）「歴史と文学の間——司馬遼太郎『坂の上の雲』における語り方——」

コメンテーター：加藤陽子（東京大学）

第2部 学位取得者による特別報告

特別報告1 五月女颯（学振PD・京都大学）

「ポストコロニアリズムからポストコロニアル・エコクリティシズムへ：ジョージア文学の事例から」

特別報告2 マヌエル・アスアヘアラモ（早稲田大学）

「20世紀と21世紀のラテンアメリカ文学者らによる、日本古典文学の翻訳とその時代背景」

第3部 特別企画「一世たちと三世たち 記憶と物語」

特別企画1 ゲスト 宮下遼（大阪大学）

「記憶の沈黙：オルハン・パムク『静かな家』におけるセラハッティンの『百科事典』をめぐる」

特別企画2 藤井光（東京大学）

「ポール・ユーンにおける過去の継承と物語の空白」

主催：東京大学人文社会系研究科・文学部
現代文芸論研究室

2020年度

・岡和田晃氏特別講演「「北海道文学」を脱構築する「アイヌ文学」——モダニズムと惑星思考」

日時：2020年6月23日

場所：オンライン（Zoom）

司会：阿部賢一

主催：主催:東京大学人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室)

・第5回現代文芸論研究報告会

日時：2020年10月31日

場所：オンライン（Zoom）

報告者：土屋優、須藤輝彦、コメンテーター：宮下志朗（東京大学名誉教授）、司会：阿部賢一

特別報告：棚瀬あずさ（日本学術振興会特別研究員 PD／慶應義塾大学訪問研究員）、邵丹（名古屋外国語大学）、今井亮一

特別企画「秋草俊一郎著『「世界文学」はつくられる 1827-2020』（東京大学出版会、2020）を読む、語る。」

特別ゲスト：秋草俊一郎（日本大学）

コメンテーター：安原瑛治、邢亚南
司会：柳原孝敦

主催：東京大学人文社会系研究科・文学部

現代文芸論研究室

2019年度

・小澤裕之氏『理知の向こう ダニイル・ハルムスの手法と詩学』出版記念特別講義
無軌条列車——ハウル発ハルムス行

日時 2019年6月14日（金） 午後5時～6時30分

場所 東京大学文学部文3号館7階スラヴ演習室（本郷キャンパス）

共催：現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室

・ミニシンポジウム 世界文学への誘い——若手研究者が語る未踏の沃野

日時 2019年6月17日（月） 午後4時50分～6時35分

場所 東京大学文学部法文2号館2階1番大教室（本郷キャンパス）

パネリスト：マヌエル・アスアヘアラモ（比較文学）、奥彩子（旧ユーゴスラヴィア圏文学）、金子奈美（バスク文学）、ベアタ・コヴァルチック（社会学・日本研究）、齋藤由美子（翻訳研究）／司会：沼野充義

主催：現代文芸論研究室

・ノラ・イクステナ氏『ソビエト・ミルク』邦訳刊行記念講演 ラトビア語で書く

日時 2019年10月4日（金） 午後5時～6時30分

場所 東京大学文学部法文1号館1階113教室（本郷キャンパス）

共催：現代文芸論研究室、駐日ラトビア共和国大使館

・第4回 現代文芸論研究室報告会日時
日時 2019年10月5日（土） 14：00～
18：00
場所 東京大学文学部法文1号館1階113教室
（本郷キャンパス）

研究報告1 土屋優（東京大学大学院人文
社会系研究科博士後期課程）

「ミラン・クンデラの情動理論的分析」
コメンテーター：ローベル柊子（東洋大
学）

研究報告2 須藤輝彦（東京大学大学院人
文社会系研究科博士後期課程）

「軽さを祝う——ミラン・クンデラ『無意
味の祝祭』について」

コメンテーター：ローベル柊子（東洋大
学）

研究報告3 杉浦清人（東京大学大学院人
文社会系研究科博士後期課程）

「統計的な語彙の多寡は文学テキストにお
いて何を意味するか？ 夏目漱石の作品を
中心に」

コメンテーター：大向一輝（東京大学）

特別報告1 片山耕二郎（共立女子大学非
常勤講師）

「ティーク『フランツ・シュテルンバルト
の遍歴』のティークらしさ」

特別報告2 仁平ふくみ（京都産業大学）

「ある風景の創出——実在する場所・記録
された出来事とフアン・ルルフォの創作と
の関係の諸相」

特別講演 町屋良平（作家）

「小説を書く体／小説を読む体」

主催：現代文芸論研究室

・高橋知之氏出版記念特別講義（東京大学
大学院人文社会系研究科・文学部助教）

永遠と私のあいだ——1840年代のロシアへ

日時 2019年10月18日（金） 午後5時～
6時30分

場所 東京大学文学部法文1号館1階113教
室（本郷キャンパス）

共催：現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ
文学研究室

・パヴェル・コジーネク氏講演会（チェコ
科学アカデミー・チェコ文学研究所研究
員） ポップカルチャーのドアを開けろ！

ビロード革命とチェコの文学シーンの変容

日時 2019年11月6日（水） 午後1時～2
時45分

場所 東京大学文学部法文1号館1階214教
室（本郷キャンパス）

主催：現代文芸論研究室

・2019年度 国際交流基金賞受賞記念講演
会 エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ氏

（ワルシャワ大学・東洋学部日本学科教
授） ポーランドと日本——友好関係の
100年

日時 2019年11月8日（金） 19:00～20:
30（18:30開場）

場所 東京大学国際学術総合研究棟 文学
部3番大教室（本郷キャンパス）

コメンテーター：稲葉千晴（名城大学都市
情報学部教授）、柴理子（城西国際大学国
際人文学部准教授）、原武史（放送大学教
授）／司会：沼野充義

共催：国際交流基金、現代文芸論研究室、
スラヴ語スラヴ文学研究室

・特別講演 尾崎真理子氏（読売新聞調査

研究本部客員研究員、文芸評論家） 大江健三郎全小説を読む—全集解説を書いてみえてきたもの—

日時 2019年12月2日（月） 17:00～18:30

場所 東京大学法文2号館2階2番大教室（本郷キャンパス）

司会：沼野充義

主催：現代文芸論研究室

・特別講演 母袋夏生（翻訳家） イスラエルとその地の文学のいま

日時 2019年12月10日（火） 15:00～16:40

場所 東京大学法文2号館地下1階2019現代文芸論演習室

司会：阿部賢一

主催：現代文芸論研究室

・特別ゲスト講義 今福龍太（文化人類学者、東京外国語大学教授）『宮澤賢治 デクノボーの叡智』をめぐって（特に第8章「終わらない植民地（コロニー）」を中心に）

日時 2019年12月16日（月） 16:50～18:35

場所 東京大学法文1号館2階219教室（本郷キャンパス）

特別ゲスト講師：今福龍太（東京外国語大学）／司会：沼野充義

主催：

・特別講演 小椋彩氏（東洋大学文学部助教） ノーベル賞作家オルガ・トカルチュクの文学とポーランドの文化をめぐって

日時 2019年12月23日（月） 午後4時50分～6時35分

場所 東京大学法文2号館2階2番大教室（本郷キャンパス）

コメンテーター：沼野充義、ベアタ・コヴァルチック（アダム・ミツキエヴィチ大学准教授・東京大学外国人特別研究員）／司会：阿部賢一

主催：現代文芸論研究室

・特別講演 ヤクブ・チェシュカ氏（カレル大学人文学部准教授） ミラン・クンデラの詩学の基礎をなすもの

日時 2020年1月11日（土） 15:00～17:00

場所 東京大学法文1号館2階219教室（本郷キャンパス）

ディスカッサント：須藤輝彦（東京大学）／司会：阿部賢一

主催：科研費・基盤研究（C）「ボヘミア文学史の記述に関する研究」（研究課題番号：19K00493、研究代表者：阿部賢一）

・『ロシア文化事典』出版記念シンポジウム 謎のロシア、魅惑の文化——ロシア文化史への新しいアプローチ

日時 2020年2月15日（土） 午後3時～6時15分

場所 東京大学法文2号館2階1番大教室（本郷キャンパス）

総合司会：沼野恭子（東京外国語大学）
開会の挨拶

編集代表：池田嘉郎（東京大学）・沼野充義・望月哲男（中央学院大学）・佐藤日登美（丸善出版）

「ここが面白い！ 『ロシア文化事典』」
沼野恭子（東京外国語大学）＋沼野恭子ゼミ

の院生・学生たち（魚住光泰、安島里奈、マリア・プロホロワ、石原知佳、土田真紀子、滝本理貢）

アプローチ① 竹田円 × 沼野充義

「ロシアの黒人」フレデリック・トーマスの波瀾万丈の人生

アプローチ② 鴻野わか菜（早稲田大学）

「ロシア現代アートと宇宙」

「あたらしい人たちとあたらしい事典をつくる」池田嘉郎＋村田優樹＋松本祐生子（東京大学）

アプローチ③ 亀山郁夫（名古屋外大）

「『二枚舌』と真実——ショスタコーヴィチとスターリン」

アプローチ④ 望月哲男（中央学院大学）

「『戦争と平和』と『罪と罰』——二人のロシア作家について考える」

共催：現代文芸論、スラヴ語スラヴ文学研究室、東京外国語大学沼野恭子研究室

協力：丸善出版（株）、JIC国際親善交流センター&ジェーアイシー旅行センター（株）

・講演と朗読劇上演「いまこそ『永遠の都』を読む/聴く——加賀乙彦『永遠の都』ロシア語訳刊行記念特別イベント」

※新型コロナウイルス感染症対策のため中止

日時 2020年3月20日（金）午後3時～6時45分

場所 東京大学法文1号館113番教室

司会 増子信一（作品社）

講演 アレクサンドル・メシェリャコフ

（ロシア国立研究大学高等経済学院古典東洋・古典古代研究所主任研究員）『永遠の都』ロシア語訳監修者）「『永遠の都』と

いう大河に浸った日々——加賀乙彦をロシア人が読む」

コメント：加賀乙彦（作家）、亀山郁夫（名古屋外国語大学学長）

朗読劇『永遠の都』上演 出演：笠原浩夫、矢代朝子、山本芳樹

共催：現代文芸論研究室、『永遠の都』ロシア語訳刊行委員会

・沼野充義教授最終講義「最新講義 チェーホフとサハリンの美しいニヴフ人——村上春樹、大江健三郎からウラジーミル・サンギへ」、シンポジウム「世界文学／翻訳／文芸」

※新型コロナウイルス感染症対策のため東京大学での開催は中止されたが、最終講義のみYouTubeで配信された。

日時 2020年3月28日（土）10 時半～

場所 東京大学法2号館文学部1番大教室（文本郷キャンパス）

開会の挨拶

10:35～11:50 第1 部「世界文学」 木村朗子、巽孝之、西成彦、野谷文昭、司会：野崎 欽

13:15～14:30 第2 部「翻訳」 柴田元幸、藤井光、松永美穂、和田忠彦、司会：都甲幸治

14:45～16:00 第3 部「文芸」 小野正嗣、柴崎友香、島田雅彦、松浦寿輝、司会：阿部公彦

16:30～沼野充義教授最終講義「最新講義 チェーホフとサハリンの美しいニヴフ人——村上春樹、大江健三郎からウラジーミル・サンギへ」

総合司会：阿部賢一、柳原孝敦

主催：現代文芸論研究室

→ ALL REVIEWSの協力のもと、YouTube
でライブ配信された。

<https://www.youtube.com/watch?v=R4pZueSRP0g>

2018年度

- ・レオナ・トーカー教授特別講義「К истории литератур Гулага и Нацистских концлагерей: сравнения или связи? ソ連とナチスドイツの収容所の文学史に向けて——比較から関係へ——」
- ・シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」
- ・レイン・ラウド博士特別講義 (Tallinn University, Estonia) 「行動における意味——統合的文化理論の試み Meaning in Action : Outline of an Integral Theory of Culture」
- ・ユスティナ・ヴェロニカ・カシャ博士特別講義 (Nicolaus Copernicus University, Poland) 「遠藤周作のエッセイと評論における悪の解釈学」
- ・デンニツァ・ガブラコヴァ博士 (ヴィクトリア大学ウェリントン) 特別講義「名指し得ぬ列島——戦後日本文学・思想におけるポストコロニアルの傷口——」
- ・シンポジウム「ポーランド文学の多様性——レム、シュルツ、フォーゲル、工藤幸雄 Różne Oblicza Literatury Polskiej: Lem, Schulz, Vogel, Yukio Kudo」
- ・大橋洋一教授東大退職記念特別講義「21世紀批評理論における4つのターン」

など

2017年度

- ・シンポジウム「中欧の現代美術」
- ・ポーランド出身の英語作家ジョセフ・コンラッド生誕160周年記念特別企画「ジョセフ・コンラッドとポーランド ワイダ監督映画『シャドウ・ライン』上映と講演」
- ・特別講義 オリガ・T・ヨコヤマ教授 (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) 「妖婆バーバ・ヤガーの謎 The Puzzle of Baba Yaga」
- ・水・5限『原典を読む』／「フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』を読む」特別授業「ジェイムズ・ジョイスとフリオ・コルタサル」〔講師 Dr. Dámaso López García (Universidad Complutense de Madrid)〕
- ・パヴェル・コジーネク氏講演会「社会主義体制下のコミックス——馴致されながらも、繁栄したチェコのコミックス」
- ・国際学術シンポジウム「チーフとサハリン島の文学А.П.Чехов и литература Сахалина」
- ・アレクサンドル・メシエリャコフ教授を迎えて 『殻』上映会
- ・ドストエフスキー国際シンポジウム・東京 International Symposium on F. M. Dostoevsky in Tokyo

など

2016年度

- ・中村隆之氏特別講義「エドゥアール・グリッサンの〈全-世界〉をめぐって」
- ・ツヴィカ・セルペル教授（テルアビブ大学芸術学部学部長）『霊と現身——日本映画における対立の美学』出版記念講演「日本映画における対立の美学」
- ・2015年度ノーベル文学賞受賞作家 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチとの対話——『戦争は女の顔をしていない』から『セカンドハンドの時代』へ——
- ・アルジェリア文学国際シンポジウム「アルジェリア文学、しかしなぜ？」

など

2015年度

- ・池澤夏樹=個人編集 日本文学全集 第13 巻『樋口一葉 たけくらべ／夏目漱石／森鷗外』刊行記念「東京大学で一葉・漱石・鷗外を読む」〔池澤夏樹（作家・詩人）、川上未映子（作家・詩人）、紅野謙介（日本大学）、沼野充義（東京大学）、カタジーナ・ソンネンベルク（ポーランド国立ヤギェロン大学文学部日本学科）によるシンポジウム〕
- ・特別講演 マリア・コダマ（ボルヘス財団代表）「ボルヘスの記憶」
- ・映画上映 シネマ・ポスト・ユーゴ2015
- ・国際シンポジウム 第9回国際中欧・東欧研究協議会幕張世界大会〔現代文芸論研究室は組織委員会事務局として協力〕

など

2014年度

- ・特別講義 加藤有子（名古屋外国語大学）「ポーランドのホロコースト記念の現在形」
- ・特別講義 ヴラジーミル・パペルヌイ博士（ハイファ大学（イスラエル）ヘブライ・比較文学科）「トルストイの神——ユダヤ=キリスト教と東洋の伝統を背景にした後期トルストイの宗教哲学における神の概念」
- ・講演会 アルマンド・ゴンサーレス＝トーレス（詩人・エッセイスト）、フリアン・ヘルベルト（詩人・小説家）「今に生きるオクタビオ・パス」
- ・講演会「ガリツィアの文化状況をめぐって 歴史の劇場としての美術館—ウクライナ国立リヴィウ美術館にみる20 世紀のガリツィア」〔講師：ヴィタ・スサク（ウクライナ国立リヴィウ美術館）、司会・イントロダクション：加藤有子（名古屋外国語大学）〕
- ・特別講義 石野裕子（常磐短期大学キャリア教養学科・准教授）「ヴァイナモイネン是谁なのか フィンランドの民族叙事詩『カレワラ（Kalevala）』解釈の変遷」

など